

女子青年の生活意識に関する研究

村 田 義 幸

A Study of "Way to Live" Consciousness of Post-Adolescent Women

Yoshiyuki MURATA

問 題

ここ数年、青年心理学の分野で、現代青年の行動、意識、態度は、変化しているのか否か、盛んに討論され、理論的考察が繰り返されている。例えば、大野（1992）は、発達心理学会第3回大会におけるラウンドテーブル・ディスカッションにおいて、現代青年の世代の特徴として、他人から指示されないと動けない、自主性・主体性・独立性の欠如、反抗しない、表面的には適応がよい等を挙げ、これは、早期幼児期の自律性と遊戯期の主導性の発達が阻害された結果であり、その阻害要因として、親の子に対する支配的態度および成績学歴尊重主義があること、また、その結果として青年期における心理的離乳がうまくいかないためであると、漸成発達理論から考察している。さらに、西平（1992）は同じディスカッションのなかで、現代青年について、旧道徳の大人からの時間的展望の欠如、自閉的不振の構え、幼児的ナーシズム、快楽傾向、宇宙的生命力のなさ、存在感の希薄さという青年像があり、他方、青年自身による、多様な価値追求の可能性、権威的他律性からの解放、ミーイズムの徹底、自己誠実性の徹底・自由な解放感と民主主義的センスととらえる青年像の2つがあるとしたうえで、世代性は1つの方向性をもって確実に変貌していると述べている。

青年の生活意識や価値観に関する研究としては、Spranger, E. (1914) や Morris, C. (1956) の価値類型論に基づく研究がよく知られている。例えば、Spranger の価値類型に基盤をおく Allport-Vernon 価値尺度と同一形式の質問紙を高校生に実施した加藤・島田（1958）は、日本の男子高校生には、理論型、経済型、権力型が多く、他方、女子には審美型、社会型、宗教型が多いことを明らかにした。狩野（1967）も同様の調査から、全体として理論型、権力型、審美型、社会型の順に価値類型が選択されていることを報告している。しかし、感覚的な価値観、ご都合主義的で快楽主義的な人生観に従って生きている人々を認めない Spranger の価値類型を用いて現代青年の価値観や生活意識の特徴を理解しようとするのは問題がある。

安藤（1965）は、Morris (1956) の5つの文化サンプルに加えて、自分自身で収集したフィリピンと日本の1964年の計7つの文化サンプル間の比較を行い、1949年の日本の青年は他の国の青年に比較して慈悲型や中庸型、努力型といった生き方を志向する傾向が見

られたが、1964年の調査では、アメリカの青年と同様、多彩型を志向する方向へ変化していると報告している。

西平（1973）は、高校生と大学生を対象に、人生態度に関する36項目からなる調査インベントリに5段階評定を求め、因子分析の研究をしている。その結果、人生態度の構造として7つの因子を抽出し、さらに、これら諸因子を検討して、信頼—不信（人生・世界・他者に対する次元）、自己形成—感性追求的（自己に対する次元）という直交する2つの基本的な軸を想定し、青年の人生に対する態度の類型を理想主義的自己形成型、ナルシスティックな自己追求型、ニヒリスティックな傍観型、体験主義的快樂追求型の4つに分類している。

村田（1977）も、女子短期大学生について、「生き方」に関する44項目からなる質問紙を用いて因子分析の研究を行い、①積極的・社会中心主義、②消極的・享楽主義、③審美主義、④実利的・個人主義、⑤神秘主義の5因子を抽出している。

本研究では、1970年代に実施された研究との比較から、現代青年の「生き方」や価値観の特徴を明らかにするのが第1の目的である。そのため、村田（1977）と同じ質問項目、同様の手続きで調査を実施し、比較を行った。さらに、価値観や「生き方」に関する意識は個々の青年の独自の行動を選択する内的枠組みであるのであるから、これらが行動選択にどの様に影響するのかを検討することを第2の目的とした。その際、青年の行動として自由度の高い余暇活動を中心に検討した。

方 法

1 調査対象

村田（1977）と比較するため、後期青年期の女性を対象とすることとし、4年制大学的女子大生91名、専門学校の女子生徒56名に対して調査を実施した。

2 調査項目

1) 生活意識に関する質問項目

青木（1970）の用いた44項目を使用した。表1. に示す44項目の「生き方」について、全く賛成（5）、賛成（4）、どちらともいえない（3）、反対（2）、絶対反対（1）の5段階評定を求めた。価値の測定を行う場合、「重要な—重要でない」、「大切な—大切でない」の用語を用いるのが適切であると言われるが（菊池, 1988）、今回の調査では、以前の研究との比較を行うために、村田（1977）と同じ用語を用いた。

2) 「余暇観」に関する質問項目

斎藤・小宮山・山田（1975）の「現代青年の余暇」に関する調査項目のうち、余暇活動の形態（スタイル）、余暇志向（機能）および生活程度に関する項目を使用した。

3) 手続き

4年生女子大生、女子専門学校生それぞれ別々に、集団で調査を実施した。調査は「生き方」に関する調査→余暇に関する調査の順に行なった。

3 調査時期

1994年1月～2月に各大学・学校において実施した。

結 果

1 「生活意識」項目の比較

生き方に関する44項目の質問に対する回答を、「全く賛成」5点～「絶対反対」1点と得点化し、評定得点の平均と標準偏差を算出した。今回の調査における専門学校生（B）と4年制大学生（C）、それに'77年に実施した女子短大生（A）の評定平均得点と標準偏差は表1. に示すとおりである。また、A、B、Cの3つの群間の評定得点の平均についてt-検定により差の検定をしたところ、統計的に有意な差異の認められた項目及び差異の方向については表1. の右端の欄に示すとおりであった。差異の認められなかった項目は14項目である。

女子青年の、各項目に対する「賛成」、「反対」を明らかにするために、操作的に、（平均値 - 1 標準偏差）が3.00以上を「賛成項目」、（平均値 + 1 標準偏差）が3.00以下を「反対項目」とすると、A群の賛成項目が、10, 17, 19, 27, 33, 36, 40の7項目であるのに対して、B群の賛成項目は10, 11, 12, 17, 19, 27, 36, 40, C群では10, 12, 17, 19, 27, 36, 40であった。A、B、C各群間の違いは11, 12, 33の3項目についてであるが、11番の「丈夫でのんきに暮らし、生活が楽しめればよい」という享乐的な生き方に対しては、A群はB、C両群よりも明らかに評定得点が低くなっている。12番の「……社会の不幸な人々のために役立ちたい」という社会的生き方に対しては、C群が他の2群よりも高い。33番「人間であるかぎり争いやねたみ合いは避けられない」については、賛成項目の操作的な定義からはA群のみで「賛成」となっているが、評定得点の比較からは3群間に大きな差異は認められない。

次に、反対項目について見てみると、A群では3, 7, 8, 29, 45の5項目が「反対」なのに対して、B群では42番の項目だけが「反対」であった。C群では、3, 7, 21, 29, 42の5項目であり、A群とC群の反対項目は近似しているが、B群は他の2群に比較して多少異なる傾向を示しているといえる。3つの群共に「反対」の項目は42番の「人々を支配管理することに最大の幸福を感じる」という、対人関係における自己主張に関する項目である。また、A、C両群に共通の反対項目は3番の「金をもうけ……」、7番「自分の利益にならない……」、29番「……神（仏）に頼るほかはない」の3項目であり、ミーゾム的、打算的生き方や宗教的、他力本願的な生き方である。

2 生活意識の因子構造

前回（村田，1977）、100名の女子短大生のデータについて、直接バリマックス法によって因子分析したところ、（1）積極的・社会中心主義、（2）消極的・享楽主義、（3）審美主義、（4）実利的・個人主義、（5）神秘主義の5因子が抽出された。

今回の調査データについても主因子法により因子分析をしバリマックス法により直交回転したところ、表2. に示すとおり、6因子が抽出された。

第1因子の因子負荷量の絶対値の高い項目は、13, 4, 43, 35, 41, 44, 36, 26である。学問・研究に関連した項目群であるが、「真理」の探求という理論型の傾向と、就職や名誉のための手段としての学習・研究の2つの側面が含まれている。そして、因子負荷量はいずれも負の値である。前回の（4）実利的・個人主義に近似した因子であるが、真理の探求という側面も含まれており、「学究的生活志向型」といえる。

表1. 「生き方」に関する44の質問項目に対する女子青年の評定平均値及び3群間の比較

No	項 目	A 女子短大生 ('77)	B 専門学校生 ('94)	C 女子大学生 ('94)	A, B, Cの評定平均値の比較
1	人間は強者と弱者とに分けることができる	2.90 (0.96) *	2.95 (0.93)	2.89 (1.02)	
2	自分の一生は小市民的幸福に安住できればよい	3.31 (0.81)	3.32 (0.83)	3.43 (0.95)	
3	金をもうけ、財産をたくわえることを第一の目的とする	2.15 (0.67)	2.89 (0.79)	2.13 (0.73)	A 《B ** B》 C
4	有名大会社に就職するために学校の成績をできるだけ良くする	2.67 (0.74)	3.20 (0.79)	2.78 (0.92)	A 《B B》 C
5	美の真髄を探求するために学生生活をおくる	3.31 (0.77)	2.98 (0.48)	3.11 (0.65)	A》 B
6	勉強も、クラブ活動も、遊びも適当にやり、決して過激な生き方をしない	2.82 (0.99)	3.05 (0.85)	2.88 (0.90)	
7	自分の利益にならないと分かったことには協力しない	2.16 (0.77)	2.64 (0.69)	2.01 (0.54)	A 《B B》 C
8	学生運動か勉強かといわれたら、学生運動を選ぶ	2.14 (0.74)	3.11 (0.79)	2.25 (0.81)	A 《B B》 C
9	今の時期は、より深い学問的知識を得るためにあると思う	3.77 (0.79)	3.48 (0.73)	3.68 (0.80)	A > B
10	人の人生は努力によってかなり変え得るものである	4.36 (0.64)	4.25 (0.74)	4.58 (0.58)	A < C B 《C
11	丈夫でのんきに暮らし、生活が楽しめればよい	3.31 (0.89)	3.88 (0.85)	3.71 (0.76)	A 《B A 《C B 《C
12	どんな役割でもよいから社会の不幸な人々の役に立ちたい	3.69 (0.70)	3.64 (0.58)	3.97 (0.60)	A 《C B 《C
13	学業、研究のトップクラスになるために一所懸命勉強する	2.81 (0.81)	3.16 (0.73)	3.10 (0.81)	A 《B A < C
14	分をわきまえて無理をせず、平凡な日常生活をおくる	3.14 (0.87)	3.66 (0.83)	3.29 (0.79)	A 《B B》 C
15	この世の中では、おもしろおかしく生きてゆくにかぎる	2.89 (0.88)	3.82 (0.83)	3.21 (0.92)	A 《B A < C B》 C
16	自分一人の苦勞で多くの人が助かるならば、苦勞することをいとわない	3.24 (0.83)	3.27 (0.77)	3.47 (0.70)	A < C
17	美的感情が豊かな人間になるように毎日をおくる	3.83 (0.81)	3.74 (0.74)	3.93 (0.66)	
18	神(仏)を信じ、つつまじやかな日常生活をおくる	2.84 (0.69)	2.89 (0.75)	2.84 (0.76)	
19	人と人との信頼感や愛を大切に生活する	4.43 (0.71)	4.21 (0.61)	4.56 (0.56)	A 《B B 《C
20	特別に将来の目的はもたなくても、その日を無事に過ごせばよい	2.38 (0.72)	2.98 (1.08)	2.43 (0.76)	A 《B B》 C
21	自分の信ずる宗教をひろめて人々を救済するために努力する	2.45 (0.67)	2.54 (0.80)	1.97 (0.80)	A 《C B》 C
22	経済的に裕福になるためにはどんな苦勞もいとわない	2.74 (0.76)	3.02 (0.61)	2.74 (0.68)	A < B B > C
23	美の追求のためには、多少の犠牲もやむを得ない	2.53 (0.84)	2.71 (0.56)	2.52 (0.78)	
24	俗世間を超越して芸術活動に専念する	2.66 (0.75)	2.71 (0.59)	2.79 (0.82)	
25	科学的理論はとうい宗教的原理に太刀打ちできるものではない	2.88 (0.84)	2.73 (0.52)	2.59 (0.71)	A > C A》 C
26	真理の探求こそわれわれのつとめである	3.28 (0.71)	3.04 (0.46)	2.86 (0.62)	A > B A》 C
27	人々が自由・平等になるために努力する	3.87 (0.63)	3.70 (0.62)	3.98 (0.63)	
28	自分の体面が傷つけられたら喧嘩をしても償わせる	2.62 (0.85)	2.91 (0.76)	2.63 (0.77)	A < B B > C
29	現在の世界的危機を救うためには神(仏)に頼るほかはない	2.17 (0.72)	2.41 (0.92)	1.96 (0.66)	A > C B》
30	適当にあたりさわりのない生活をする	2.64 (0.94)	3.18 (0.85)	2.92 (0.74)	A 《B A < C
31	人の一生はなるようにしかならない	2.75 (1.01)	3.21 (0.94)	2.75 (0.93)	A < B B》 C
32	芸術的創作に生きがいを感じる	3.22 (0.83)	2.95 (0.79)	3.25 (0.85)	B < C
33	人間であるかぎり争いやねたみ合は避けられない	3.69 (0.67)	3.62 (0.77)	3.54 (0.73)	
34	勝手気ままにしたいことをして生きる	2.49 (0.93)	2.77 (0.78)	2.62 (0.72)	
35	より高度な理論を研究するための基礎として現在という時期がある	3.62 (0.71)	3.34 (0.51)	3.27 (0.73)	A》 B A》 C
36	学生時代という許された自由な期間をせいじいばい楽しむ	4.24 (0.76)	4.23 (0.71)	4.30 (0.75)	
37	悩みを解決する一番よい方法は、くよくよしないで一所懸命仕事(勉強)に打ち込むことだ	3.26 (1.03)	3.18 (0.89)	3.04 (0.96)	
38	科学的文献よりも宗教的文献に心のよりどころを求める	2.87 (0.83)	2.59 (0.62)	2.34 (0.79)	A > B A》 C B > C
39	明日のことはわからないから、現在を楽しく生きられればよい	3.13 (0.92)	3.73 (0.83)	3.04 (0.95)	A 《B B》 C
40	友人のうれしいこと、悲しいことを自分のことのように共に喜び、共に悲しむ	3.74 (0.72)	4.05 (0.74)	4.13 (0.63)	A < B A 《C
41	学問的真理を追求するために現在をおくる	3.04 (0.75)	2.96 (0.57)	3.00 (0.68)	
42	人々を支配、管理することに最大の幸福を感じる	2.12 (0.82)	2.18 (0.85)	1.67 (0.66)	A 《C B》 C
43	就職のため少しでも良い点をとるように努力する	2.89 (0.88)	3.54 (0.76)	3.37 (0.86)	A 《B A 《C
44	ゆるぎない科学的知識体系を作ることを目的にしている	2.76 (0.59)	2.84 (0.45)	2.76 (0.73)	

* () 内の数字は標準偏差。 ** 《は p<.01, <は p<.05 で統計的に有意な差で、不等号は平均の大小を示す。

第2因子については、39, 34, 15, 20, 7の因子負荷量が高く、またいずれの項目も正の値を示している。消極的で快樂追求的な生き方であり、「享樂的生活志向型」といえる。

第3因子の因子負荷量の高い項目は38, 29, 21, 18, 25, 8の6項目であり、8番以外はいずれも「宗教」に関する項目であり、「宗教的生活志向型」因子といえる。

第4因子は、2番, 6番, 14番, 30番の消極的で平凡な生活を志向する生き方と11番の

享樂的な生き方に関する項目の因子負荷量が高く、「安定的生活志向型」因子である。

第5因子負荷量の絶対値が大きい項目は、40, 12, 19, 16, 3, 42の6項目であり、3番と42番が負の因子負荷量を写している。40番の共感性, 12番, 16番の社会的役割, 19番の社会的連帯で正の値を示し、3番の私有財産の蓄積, 42番の自己主張で負の値を示していることからこの因子は「社会的生活志向型」因子であるといえる。

第6因子は、17, 32, 5, 24, 23の5項目の因子負荷量が大きく、いずれも美的生活, 芸術的生活に関係した項目でありこの因子は「審美的生活志向型」といえる。

前回の因子構造と今回の因子構造を比較してみると、ほぼ類似した構造であるといえるが、前回第2因子として抽出された「消極的・享樂主義が、今回の因子構造においては第2因子の享樂的生活志向型と第4因子の安定的生活志向型の2つの独立した因子として抽出されている。

表2. 「生き方」に関する項目の因子負荷量

項目番号	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
13	-.742	.063	-.031	-.014	.112	.216
4	-.586	.268	-.109	.120	.005	.151
43	-.550	.282	.016	-.002	.183	.378
35	-.532	-.031	.331	.076	-.088	.080
41	-.507	-.259	.358	.168	.088	.236
44	-.466	-.136	.186	.074	.056	.230
36	-.417	.395	.006	-.076	.201	-.018
26	-.403	-.147	.316	.109	-.047	.159
39	-.205	.660	.099	.132	.126	.160
34	.041	.628	-.181	-.031	-.014	-.060
15	-.174	.522	-.048	.140	-.100	.225
20	.319	.520	.017	.260	-.050	.019
7	-.061	.491	.181	.046	-.331	.002
38	-.066	.099	.692	.019	.116	-.082
29	-.082	.055	.611	.055	.023	.129
21	-.018	-.131	.592	.057	.077	.308
18	-.107	-.177	.516	.296	.031	.304
25	.075	-.027	.481	.061	-.224	.192
8	.291	.134	.450	-.080	.091	-.033
2	-.008	-.018	.079	.680	.304	-.213
14	.039	.187	.059	.651	.075	-.134
31	-.107	.199	.102	.644	-.128	-.054
6	-.063	-.055	-.073	.583	-.308	.127
11	-.204	.376	-.072	.401	-.027	-.179
40	-.145	.162	.133	.126	.647	.077
12	-.131	-.117	-.094	.027	.592	.111
19	-.215	.049	.150	-.067	.512	.157
16	.014	-.149	.168	-.209	.499	.187
3	-.142	.158	.025	-.161	-.438	.051
42	-.053	.103	.381	-.190	.429	.057
17	-.244	.053	-.109	-.130	.138	.675
32	-.164	.042	.295	-.186	.154	.647
5	-.185	.039	.037	.032	.088	.616
24	-.045	-.020	.382	-.111	-.087	.577
23	-.360	.116	.038	-.059	-.092	.497
1	-.082	.117	.138	-.326	-.274	.046
9	-.211	-.017	.172	-.061	.293	.053
10	-.121	.043	.157	-.219	.318	.074
22	-.230	-.045	.249	.073	-.274	.045
27	-.328	.084	.050	-.112	.361	-.035
28	-.299	.248	.333	-.250	-.207	-.141
31	-.073	.098	.123	.325	-.227	-.151
33	.016	.193	.051	-.127	.070	.046
37	-.300	.043	.358	-.210	.005	-.176

3 因子得点の比較

因子分析の結果抽出された6因子それぞれについて、因子負荷量が高く、かつ、他の因子における負荷量が小さい項目を5項目選び、因子得点を算出した。ただし、第5因子の因子得点については3番の負荷量が負の値であるため、「絶対に反対」5点～「全く賛成」1点と、得点の方向を逆にした。表3. は、今回の調査対象である4年制大学生と専門学校生の因子得点の平均と標準偏差及び両群間の平均値の差の検定結果を示したものである。

表3. 4年制女子大学生と女子専門学校生の因子得点

因子の名称	女子大学生 (n=91)	専門学校生 (n=56)	差の検定
F 1 学究的生活志向 (項目番号 4, 13, 35, 41, 43)	15.53 (2.82)	16.20 (2.35)	t = 9.56, p < .01
F 2 享楽的生活志向 (項目番号 7, 15, 20, 34, 39)	13.31 (2.61)	15.95 (2.60)	
F 3 宗教的生活志向 (項目番号 18, 21, 25, 29, 38)	12.69 (2.65)	13.16 (2.74)	
F 4 安定的生活志向 (項目番号 2, 6, 11, 14, 30)	16.23 (2.82)	17.04 (2.79)	t = 4.79, p < .01
F 5 社会的生活志向 (項目番号 3, 12, 16, 19, 40)	20.00 (2.08)	18.27 (2.16)	
F 6 審美的生活志向 (項目番号 5, 17, 23, 24, 32)	15.60 (2.76)	15.09 (1.98)	

4年制大学の女子大生では、第5因子の因子得点が、他の因子得点と比較して高く、次いで第4因子、第6因子、第1因子と続き、第2因子と第3因子の因子得点はかなり低い。他方、女子専門学校生では、第5因子の因子得点が1番高く、第3因子の得点が最低である点では大学生と同じであるが、第6因子と第2因子において大学生との差異が認められる。女子大学生と女子専門学校生について、6つの因子得点間の平均を比較すると、女子大学生については、 $F5 > F4 = F6 = F1 > F2 > F3$ の関係が、また、女子専門学校生については $F5 > F4 = F1 > F2 > F6 > F3$ という関係にあった。

次に、女子大生と女子専門学校生の平均因子得点を6つの因子毎に比較してみたところ、第2因子の享楽的生活志向因子と第5因子の社式的生活因子の2因子において統計的に有意な差が認められ、第2因子では専門学校生、第5因子では大学生の平均因子得点が高いことが明らかになった。

4 余暇観と生活程度の認知

(1) 余暇活動の形態(スタイル) : 余暇の過ごし方として、よく採るやり方について、表4. に示すとおりA～Hまでの8項目について回答を求めた。各質問項目ともに両極的なタイプが対になっており、調査対象者にはいずれか一方を選択させた。4年制大学生と専門学校生の回答結果は表4. のとおりである。

2つの対象者群の等質性を検討したところ、「C 発散橋-充実型」と「H 勉強生きがい型-余暇活動生きがい型」の2つのスタイルに異質性が認められた。つまり、女子大学生では気晴らしというよりも、精神的な充実を求めて余暇活動を行おうとする学生が多いのに対して、専門学校生では発散型と充実型の度数がほぼ同数となっているのである。また、Hの生きがい感のタイプについては、両群ともに勉強型<余暇活動型ではあるが、この傾向が専門学校生の方がより大きくなっている。「A 自主計画型-他者依存型」については、統計的な有意差ではないが両タイプの比率が逆転している。残りの5スタイルでは、能動型>受動型、外出型>在宅型、他者中心型>自己中心型、没入型>非没入型、

自由時間希望>収入希望と同様の比率を示している。

(2) 余暇志向(機能)について:表5は、10項目の余暇志向の型の中から、余暇の過ごし型として望むものを3位まで、順位をつけて選択してもらった結果である。両群ともに、上位に選択された型は「融和型」、「解放型」、「休養型」であり、逆に、「奉仕型」、「勉強型」、「健康型」の選択される比率は極めて低い。

表4. 学校種別の余暇活動の形態(スタイル)

*数字は人数, () 内は%

「余暇の過ごし方」において、よく採用されるやり方のタイプ [] 内はタイプ名		女子大学生	専門学校生	両群間の等質性検定
A	自分で計画することが多い [自主計画性]	58 (63.7)	27 (48.2)	$\chi^2=2.82$
	他人(友人や家族、観光業者など)の立てた計画によることが多い [他者依存型]	33 (36.3)	29 (51.8)	
B	自分で実際に体を動かしてやる活動がよい [能動型]	58 (63.7)	33 (58.9)	$\chi^2=0.17$
	他人がするのを見たり、書かれたものを読んだりする方がよい [受動型]	33 (36.3)	23 (41.1)	
C	日頃のうさばらしができればよい [発散型]	24 (26.4)	27 (48.2)	$\chi^2=6.37$ $p<0.05$
	やはり精神的な充実感が必要である [充実型]	67 (74.6)	29 (51.8)	
D	できれば外出して楽しみたい [外出型]	71 (78.0)	42 (66.7)	$\chi^2=0.05$
	なるべく自分の家で過したい [在宅型]	20 (22.0)	14 (33.3)	
E	まず家族や友人の希望を考える [他者中心型]	56 (61.5)	38 (67.9)	$\chi^2=0.36$
	自分の希望を第一にしたい [自己中心型]	35 (38.5)	18 (32.1)	
F	仕事や家事のことは忘れて完全に楽しむ方である [没入型]	70 (76.9)	47 (83.9)	$\chi^2=0.66$
	仕事や家事が気になって、あまりよく楽しめない [非没入型]	21 (23.1)	9 (16.1)	
G	収入は今のままでよいから、自由な時間がもっとほしい [自由時間希望]	69 (75.8)	38 (67.9)	$\chi^2=0.75$
	暇な時間があつたら、もっと収入を増やすために働きたい [収入希望]	22 (24.2)	18 (32.1)	
H	勉強や仕事の方に生きがきを感じる [生きがいー勉強型]	37 (40.7)	8 (14.3)	$\chi^2=10.14$ $p<.01$
	余暇活動の方に生きがいを感じる [生きがいー余暇活動型]	54 (59.3)	48 (85.7)	

表5. 余暇志向(機能)の型

(%)

対象者群	女子大学生 (n=91)				専門学校生 (n=56)			
	1位	2位	3位	累計	1位	2位	3位	累計
余暇志向の型 [] 内は型の名								
生活の疲れがいやされて、明日への活力が得られるもの [休養型]	36.3%	22.0	12.1	70.4 ②	28.6	8.9	25.0	62.5 ③
身体が鍛えられて健康を保つのに役立つもの [健康型]	3.3	2.2	3.3	8.8	1.8	3.6	1.8	7.2
教養が身につく心が豊かになるもの [教養型]	1.1	13.2	16.5	20.8	3.6	8.9	12.5	25.0
家族や友人といった親しい人たちとの心の結びつきが深められるもの [融和型]	28.6	28.6	22.5	79.7 ①	28.6	37.5	10.7	76.8 ①
社会や世の中のために役立つことのできるもの [奉仕型]	0.0	2.2	2.2	4.4	0.0	0.0	0.0	0.0
自分の仕事や勉強に役立つ知識や技術が身につくもの [勉強型]	0.0	2.2	4.4	6.6	1.8	1.8	1.8	5.4
普段の生活では味わうことのできない珍しくて生き生きとした体験が得られるもの [解放型]	20.9	22.0	17.6	60.5 ③	26.8	23.2	23.2	73.2 ②
楽しみながら、なんらかの物理的的利益が得られるもの [実利型]	0.0	0.0	7.7	7.7	3.6	7.1	10.7	21.4
人間としての修養になり人格的に向上できるもの [修養型]	3.3	5.5	7.7	16.5	1.8	5.4	1.8	9.0
煩わしい日常生活から逃れて打ち込むことのできるもの [脱出型]	6.6	2.2	5.5	14.2	3.6	3.6	12.5	19.7

(3) 生活程度の評価と生活の時間的展望：Cantril, H. (1965) の「はしご－尺度 (ladder scale)」を用いて、自分の生活程度をどのように認知しているのかを測定した。「今の生活」、「5年前の生活」および「5年後の生活」の3つについて尺度上に評定を求めた結果は表6. に示すとおりである。女子大学生では「5年前の生活」が一番低く、「今の生活」、「5年後の生活」の順で生活程度の評価は高くなっている。となっている。また、「今の生活」を基準にして過去および将来の生活を見てみると、多少明るい時間的展望を抱いていると言える。他方、女子専門学校生の場合、「今の生活」が一番低く、「5

表6. 生活程度の評定値と生活の時間的展望

() は S D

生活の時期および比較差	女子大学生	専門学校生
今の生活 (A)	5.92 (1.87)	5.29 (2.25)
5年前の生活 (B)	5.40 (1.95)	5.72 (2.08)
5年後の生活 (C)	7.71 (1.47)	7.35 (1.82)
(A) — (B)	0.53 (2.41)	-0.43 (2.77)
(C) — (A)	1.79 (1.82)	2.06 (2.17)

年前の生活」、「5年後の生活」と続いている。将来に対する時間的展望を示す指標である（「5年後の生活」－「今の生活」）の値は女子大学生よりも高いが、「今の生活」の評価が低すぎるためであって、「5年後の生活」に明るい展望をもっているとは言えない。

5 生活意識と余暇観および生活程度の認知との関係

(1) 余暇活動の形態（スタイル）と生活意識の関係：表7は、余暇の過ごし方における8つの形態（スタイル）それぞれにおける対立タイプ別に、6つの生活因子得点の平均と標準偏差を示したものである。女子大学生と女子専門学校生の両群別々に、8形態について、各形態におけるタイプを目的変数、生活意識6因子得点を説明変数としてマハラノビスの距離による判別分析を行った。その結果、女子大学生については〔自主計画型／他者依存型〕の形態で第1因子得点、〔他者中心型／自己中心型〕で第6因子得点、〔没入型／非没入型〕で第5因子得点、〔自由時間希望型／収入希望型〕で第6因子得点、〔勉強生きがい型／余暇生きがい型〕で第2因子得点と第6因子得点が説明変数として採用され得ることが明らかになった。また、女子専門学校生では、〔自主計画型／他者依存型〕で第3因子得点が説明変数として採用され得るだけであった。しかも、いずれの場合においても誤判別の確率が高いため、生活意識因子得点を、各形態におけるタイプを判別する資料として用いることはできない、と言える。

なお、余暇志向の型と生活意識の関係については、調査対象者の選択の60%以上が休養型、融和型、解放型の3つの型に集中し、他の型を選択する対象者が極端に少なかったため、分析することができなかった。

(2) 生活程度の評価、時間的展望と生活意識の関係：表8. は、生活程度、時間的展望の評定値と生活意識因子得点の相関係数である。女子大生群では、「今の生活」の評定値とF5の社会的生活志向因子の間、および「5年後の生活」とF4の安定的生活志向因子並びにF5の社会的生活志向因子の間で相関関係が認められたが、その他の項目では認められなかった。また、女子専門学校生の場合、統計的に有意な相関は皆無であった。

表7. 余暇活動の形態（スタイル）と生活意識因子得点の平均と標準偏差

余暇の過ごし方におけるやり方のタイプ		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
女子大学生	自主計画型 (n=58)	15.05 (2.75)	13.28 (2.80)	11.28 (2.60)	15.78 (2.87)	20.22 (2.17)	15.74 (2.72)
	他者依存型 (n=33)	16.36 (2.75)	13.36 (2.23)	12.42 (2.59)	17.03 (2.53)	19.61 (1.86)	15.36 (2.82)
専門学校生	自主計画型 (n=27)	16.48 (2.38)	15.89 (2.67)	12.15 (2.78)	6.81 (3.24)	19.19 (2.14)	15.30 (2.14)
	他者依存型 (n=29)	15.93 (2.29)	16.00 (2.53)	14.10 (2.25)	17.24 (2.27)	19.34 (2.17)	14.90 (1.83)
女子大学生	能動型 (n=58)	15.66 (2.81)	13.28 (2.52)	11.68 (2.93)	15.95 (2.82)	20.03 (2.15)	15.84 (2.71)
	受動型 (n=33)	15.30 (2.82)	13.36 (2.76)	11.73 (2.08)	16.73 (2.74)	19.94 (1.95)	15.18 (2.80)
専門学校生	能動型 (n=33)	16.21 (2.21)	15.97 (2.52)	13.79 (2.46)	17.09 (2.62)	18.55 (1.86)	15.03 (2.14)
	受動型 (n=23)	16.17 (2.53)	15.91 (2.72)	12.26 (2.79)	16.96 (3.01)	17.87 (2.47)	15.17 (1.74)
女子大学生	発散型 (n=24)	15.87 (2.77)	14.21 (3.12)	11.33 (2.88)	16.29 (2.65)	19.62 (2.23)	15.29 (2.03)
	充実型 (n=67)	15.40 (2.83)	12.99 (2.31)	11.82 (2.56)	16.21 (2.87)	20.13 (0.01)	15.72 (2.97)
専門学校生	発散型 (n=27)	15.93 (1.92)	15.70 (2.73)	13.33 (2.52)	17.37 (2.61)	18.04 (2.27)	14.52 (1.55)
	充実型 (n=29)	16.45 (2.66)	16.17 (2.45)	13.00 (2.85)	16.72 (2.91)	18.48 (2.03)	15.62 (2.19)
女子大学生	外出型 (n=71)	15.82 (2.67)	13.20 (2.64)	11.68 (2.82)	16.28 (2.67)	20.23 (1.99)	15.69 (2.84)
	在宅型 (n=20)	14.50 (3.11)	13.70 (2.47)	11.75 (1.97)	16.05 (3.29)	19.20 (2.20)	15.30 (2.45)
専門学校生	外出型 (n=42)	16.29 (2.48)	16.24 (2.60)	13.57 (2.43)	17.43 (2.52)	18.60 (2.23)	15.24 (2.04)
	在宅型 (n=14)	15.93 (1.87)	15.07 (2.40)	11.93 (3.08)	15.86 (3.20)	17.29 (1.58)	14.64 (1.72)
女子大学生	他者中心型 (n=56)	15.39 (2.87)	13.37 (2.73)	11.70 (2.70)	16.70 (2.74)	20.05 (2.16)	14.91 (2.46)
	自己中心型 (n=35)	15.74 (2.73)	13.20 (2.40)	11.69 (2.58)	15.49 (2.78)	19.91 (1.95)	16.71 (2.85)
専門学校生	他者中心型 (n=38)	16.03 (2.21)	15.50 (2.51)	13.08 (2.64)	16.61 (2.63)	18.53 (2.21)	15.00 (1.86)
	自己中心型 (n=18)	16.56 (2.59)	16.89 (2.54)	13.33 (2.83)	17.94 (2.90)	17.72 (1.94)	15.28 (2.21)
女子大学生	没入型 (n=70)	15.26 (2.70)	3.29 (2.58)	11.61 (2.54)	16.07 (2.90)	19.70 (2.12)	15.71 (2.84)
	非没入型 (n=21)	16.43 (3.03)	13.38 (2.70)	11.95 (3.00)	16.76 (2.43)	21.00 (1.57)	15.24 (2.45)
専門学校生	没入型 (n=47)	16.11 (2.42)	16.13 (2.75)	13.11 (2.85)	17.23 (2.82)	18.53 (2.15)	15.02 (2.03)
	非没入型 (n=9)	16.67 (1.89)	15.00 (1.25)	13.44 (1.71)	16.00 (2.36)	16.89 (1.59)	15.44 (1.71)
女子大学生	自由時間希望型 (n=69)	15.45 (2.73)	13.28 (2.66)	11.57 (2.91)	16.42 (2.84)	20.00 (2.03)	15.13 (2.60)
	収入希望型 (n=22)	15.77 (3.09)	13.41 (2.44)	12.09 (1.56)	15.64 (2.67)	20.00 (2.24)	17.09 (2.73)
専門学校生	自由時間希望型 (n=38)	16.13 (2.179)	15.68 (2.48)	13.21 (2.80)	16.89 (2.60)	18.53 (2.06)	14.87 (1.96)
	収入希望型 (n=18)	16.33 (2.69)	16.50 (2.75)	13.06 (2.48)	17.33 (3.13)	17.72 (2.26)	15.56 (1.95)
女子大学生	勉強生きがい型 (37)	15.84 (2.92)	12.54 (2.13)	11.97 (2.68)	15.86 (2.52)	19.97 (2.48)	16.30 (2.77)
	余暇活動生きがい型	15.31 (2.73)	13.83 (2.77)	11.50 (2.62)	16.48 (2.98)	20.02 (1.76)	15.13 (2.65)
専門学校生	勉強生きがい型 (8)	17.75 (2.11)	16.00 (1.12)	12.12 (3.41)	15.12 (3.18)	18.37 (2.29)	15.00 (2.29)
	余暇活動生きがい型	15.94 (2.29)	15.94 (2.77)	13.33 (2.53)	17.35 (2.59)	18.25 (2.14)	15.10 (1.93)

表 8. 生活程度の評価と生活因子得点の相関

生活の時期および比較差		F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
今の生活 (A)	女子大学生	.219	.004	.037	.090	.282※	.148
	専門学校生	-.095	.118	-.181	-.034	-.260	-.037
5年前の生活 (B)	女子大学生	.042	-.166	-.013	-.137	.016	.050
	専門学校生	-.048	.071	-.047	-.058	-.191	-.163
5年後の生活 (C)	女子大学生	.019	.049	.008	.244※	.334※	.087
	専門学校生	-.019	.194	-.127	-.064	-.112	-.153
(A) - (B)	女子大学生	.136	.138	.040	.181	.206	.074
	専門学校生	-.042	.044	-.113	.014	-.070	.091
(C) - (A)	女子大学生	.209	-.035	.032	-.104	.020	.081
	専門学校生	-.084	-.038	-.084	.018	-.178	.089

考 察

1 現代の女子青年の生活意識

今回の研究においては、人間の様々な生き方のうち、現代の女子青年がどのような生き方に賛成し、逆に、どのような生き方に反対なのかを検討するために、44項目の生き方について「賛成－反対」の5段階評定を求め、その結果について項目間の比較および因子間の比較を行った。

(1) 生き方に関する項目間の比較

女子青年の「生き方」観の変化を知る資料を得るために、1977年度調査の女子短期大学生の資料と、今回調査した資料との比較を44項目全てについて実施した。その結果は表5.のとおりである。A群（'77女子短期大学生）とB群（'94専門学校生）の間では22項目、A群とC群（'94女子大学生）の間に16項目、B群とC群の間に20項目について統計的に有意な差が認められた。このうちA<B、Cの関係にある項目は、「11 丈夫でのんきに暮らし、生活が楽しめればよい」、「13 学業、研究のトップクラスになるために一所懸命勉強する」、「15 この世の中では、おもしろおかしく生きてゆくことにかぎる」、「30 適当にあたりさわりのない生活をする」、「40 友人のうれしいこと、悲しいことを自分のことのように共に喜び、共に悲しむ」および「43 就職のため少しでも良い点をとるように努力する」の6項目である。逆に、A>B、Cの関係にある項目は、「26 真理の探求こそわれわれのつとめである」、「35 より高度な理論を研究するための基盤として現在という時期がある」、「38 科学的文献よりも宗教的文献に心のよりどころを求める」の3項目である。学習・勉強を真理の探求や研究の基盤づくりと考える傾向は'77年度の方が高く、他方、それらを成績の順位や就職の為など手段として考える傾向は'94年度の調査の方が高くなっている点、大いに興味を引く。また、享樂的で安定した生活を求める傾向も一段と増していることも明らかになった。

年度間の比較とともに、目を引くのがB群の結果である。B>A、Cの関係にある項目が11項目、B<A、Cの関係にある項目が2項目有り、A群とC群間の差異よりもはるかに大きな違いがAとB、BとCの間には認められる。特に、7、15、20、39番の4つの項

目が高く、享樂的な生活志向の強さが窺える。さらに、3番と22番の経済生活志向性も高くなっている。なお、19番の項目では、B群が他の2群より低くなっているが、評定点数そのものは4.20と高く、対人関係における信頼や愛の大切さを重視していることでは差異はない。

（2）生活意識構造と因子得点

'94年度の調査資料をもとに主因子法により因子分析し、バリマックス法により直交回転した結果、6因子が抽出され、（1）学究生活志向型、（2）享樂的生活志向型、（3）宗教的生活志向型、（4）安定的生活志向型、（5）社会的生活志向型、（6）審美的生活志向型と命名された。これは、前回の村田（1977）とほぼ類似した因子構造であるといえる。

この6因子について因子得点を求めた。女子大学生では、社会生活志向因子の得点が一番高く、以下、安定的生活志向因子得点、審美的生活生活志向因子得点、学究的生活志向因子得点と続き、享樂的生活志向と宗教的生活志向の因子得点はかなり低くなっている。現実の具体的な行動の中で十分に表現されているかどうかは別にして、信頼と愛情に満ちた対人関係の中で共生的な生活を目指している健全な姿を窺うことができる。また、青年と宗教の関係については、社会問題化した事柄ではあるが、全体としては現代青年の宗教離れを確認する結果となっている。

女子専門学校生についても、社会生活志向因子得点が一番高く、宗教生活志向因子得点が最低である点では女子大学生と同様であるが、審美的生活志向因子得点と享樂的生活志向因子得点において両群間に統計的な有意差が認められた。女子大学生の方が、社会的な生活を志向する傾向が強く、他方、女子専門学校生の方は、享樂的な生活を志向する傾向が強いということになる。青年後期にある若者の心理的特徴や行動上の違いについて検討するとき、専門学校生と大学生とでは多少、異質な側面があるのではないと言われるが、今回の結果はそのような傾向を窺い知る結果となった。

（3）余暇観、生活の時間的展望と生活意識との関係について

青年のもつ生活意識や価値観は内的関係枠として個人の行動に影響するであろうという仮説のもとに、今回は青年の余暇活動および生活の時間的展望と生活意識の関係について検討した。余暇志向（機能）については、10タイプの余暇志向の型のうち休養型、融和型、解放型の3つに選択が集中し他のタイプの選択率が極端に少なかったため生活意識との関係を分析することができなかった。余暇活動の形態（スタイル）については、8形態についてそれぞれタイプ別の生活因子得点を計算し、判別分析を行ったが、いずれの形態においても誤判別の確率が高く、生活因子得点から余暇活動の形態を高い信頼性をもって予測することはできないことが明らかになった。

生活程度の評価および生活の時間的展望と生活意識構造の関係については、女子専門学校生については有意味な関係は認められなかったが、女子大学生については、現在の生活の評価と社会的生活志向因子の間、5年後の生活程度の予測と宛定的生活志向因子および社会的生活志向因子の間に有意味な関係が見いだされた。今の生活程度を比較的高く評価し、将来について楽観的に見ている青年は、円満な対人関係を大切に、過激な生活よりも安定した生活を志向する青年であるといえる。

今回、生活意識が青年の行動にどの様に影響するのかを検討するために、余暇活動と生

活程度の評価および生活の時間的展望について検討したが、生活意識と青年の余暇活動、生活程度の評価との明確な関係を明らかにすることはできなかった。この点、青年の行動レパートリーの範囲を拡大してさらに検討を加える必要があるであろう。また、生活意識について、'77年度の調査資料との比較を行うために「賛成－反対」について評価を求めたが、菊池（1989）の指摘する「重要な（大切な）－重要でない（大切にない）」の形で評価を求めるよう改めることも必要であろう。

井上（1993）は、青年の価値観を測定する尺度として自己成長性、経済的安定性、自立性、身体的活動、対人志向性、愛他性、社会的評価、家庭生活、学歴尊重、健康性の10尺度（因子）で構成するのが有効であるとして、各尺度4項目計40項目で構成される価値観尺度を作成しているが、青年の価値観や生活意識を測定するための項目分析も再検討したい課題である。

参考文献

- 青木孝悦 1970 大学生の価値類型について 心理学研究 41 2 83-89
- 安藤延男 1974 大学生の価値観の継時的研究 日本教育心理学会第8回総会論文集
- 井上和子 1993 現代青年の行動様式と価値観—新価値尺度の作成— 日本教育心理学会第35回総会発表論文集 S46-S47
- 大野 久 1992 現代青年の特質 日本発達心理学会第3回大会発表論文集 31
- 加藤隆勝・島田一男 1958 価値態度に関する調査研究—オールポート、バーノン、リンゼイの<価値の研究>についての吟味— 日本心理学会第22回大会
- 狩野素朗 1967 大学生の価値観—その1— 厚生補導 15 36
- 菊池章夫 1988 青年の価値観 西平直喜・久世敏雄（編）青年心理ハンドブック 第15章 411-428
- 村田義幸 1977 大学生の生活意識に関する研究 活水論文集 20 87-98
- 村田義幸 1990 青年の生活意識に関する一研究 長崎大学教育学部教育科学研報 38 27-38
- 依田 新 1975 現代青年の生態 金子書房